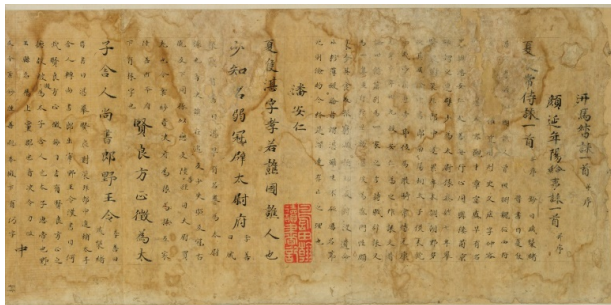




国宝 文選集注(10-12世紀(平安時代)書写)



アヘン戦争図(エドワード・ダンカン、1843年
ロンドン刊)*後期展示(10/25~11/23)

目 次

① 展示紹介

特 別 展 「知の大冒険 -東洋文庫 名品の煌めき-」

② 収蔵史料(資料)紹介

歴史資料課 「佐竹彦四郎宛沙弥某奉書」

行政資料課 「広報広聴課写真資料」の読みどころ-資料の「分類」
をめぐって-

③ トピックス

令和4年度 上半期の歴史館

展示紹介

秋の特別展「知の大冒険—東洋文庫 名品の煌めき—」

令和4年9月27日（火）～11月23日（水・祝）

【展示概要】

東京都文京区に位置する東洋文庫は、東洋学分野でのアジア最大級の研究図書館であり、世界五大東洋学研究図書館の一つです。三菱第三代社長岩崎久彌が、北京駐在のオーストラリア人ジャーナリスト、G.E. モリソンの2万冊に及ぶ文献を核に1924（大正13）年に東洋文庫を設立しました。

本展は、東洋文庫の所蔵する約100万点の書物や地図、絵画から厳選した名品約100点を紹介する巡回展です。誰もが教科書等で一度は目にしたことのある書物や絵画から始まり、世界に数点しかない稀^き観^{こう}本や「未知の知」を伝える情熱にあふれた書物や地図絵図、絵画図版などの「大海原」に一緒に漕ぎ出していきましょう。日本の周囲の海から外へ航^{わた}るように文化の近しさと大いなる違いを共に感じ取って下さい。知や文化はぶつかり合うものです。東洋世界の中での融合や西洋世界との化学反応が、グローバルな世界に生きる我々にはどのように見えるでしょうか。実は知らないことは世にたくさんあります。「知への渴望」サインを出してみましょう。本展での知の大冒険を終えたあなたに、書物や絵図を手にとって、見て触れることでの「知の実感」を感じ取っていただけたら幸いです。

【各章概要】

〇プロローグ

さあ、ここから冒険のはじまりだ。さっそく東洋世界へ漕ぎ出してみよう。

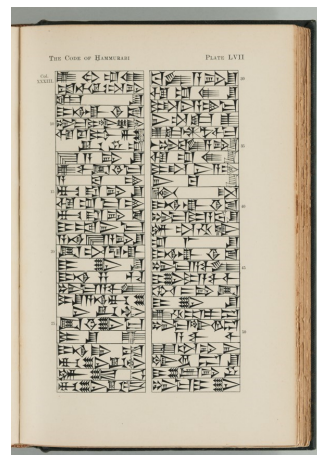
おっと、でも気をつけてほしい。「東洋」は、もともと海域を示した言葉だけれども、今はむしろ陸域に広がる人間社会や文化に対して使用する。東洋より、「アジア」といったほうが馴染み深いだろうか。そう、私たちはこれからアジアの人々の記憶や物語を探しに行くのだ。

そのアジアも語源的には東方を指すらしい。西の人々からみて東の世界。その人々が古代ギリシャ人か、ローマ人か、はたまた現代ヨーロッパ人か。人によって東方が指すところは変わり、アジアも東洋も伸縮する。ここではまず、その西洋人がつくった地図をガイド代わりにみておこう。アジアの広大な領域が一望できるだろう。

しかし、地図には描かれていないものがたくさんある。土地の正確な形もそうだが、それは、東洋に育まれた多様かつ魅力あふれる文化の姿だ。プロローグでは、その象徴として「言葉」をとりあげた。東洋世界への旅のはじまりとして、紀元前の昔から今日までこの地に生み出されてきた数々の言葉にふれていただこう。



アジア新図（アブラハム・オルテリウス、
1570年、アントワープ刊）
＊前期展示（9月27日（火）～10月23日（日））



ハンムラビ法典（ハーパー、
1904年、シカゴ・ロンドン刊）

○第1章 東洋の旅

- (1) 中国—悠久の歴史を彩る人々—
- (2) 朝鮮—東アジアの交流—
- (3) 東南アジア—航海の結節点—
- (4) インド—人々を魅了し続ける文明—
- (5) イスラーム世界—世界に広がる規範と文化—

「言葉」のあとは、文字と図版から東洋の多彩な魅力をアラカルトで味わっていただく
としよう。

日本を出帆、針路は西へ。中国、朝鮮、東南アジア、インド、そしてイスラーム世界。
各エリアの文化や風土の特徴的な一面を百科辞典、歴史書、地理書、探検記たちが案内し
てくれる。貿易風と潮流に乗り、様々な文物が往来した東洋世界は、未知と既知が輻輳^{ふくそう}
する“知の海”だった。まもなくこの船上からも、古人の「知りたい」と「知らせたい」が
めぐり流れる様が見えてくるはずだ。

知の情報源をほぼ一手に書物が担っていた時代の世界を想像しよう。古の航海者たちが
星を航海の目印にしたように、他地域の文化、風俗、習慣等の情報は、東洋世界の人々が
「自分たち」の位置を知る指標でもあった。書き記し、描き継がれた書承^{しよしょう}のほか、「語り」
すなわち口承もある。そんな知の伝達の仕方にもぜひ注目してほしい。

^{てのひら}掌に載せたスマートフォンで、常時、世界の情報と繋がれる私たちの日常と比べてみ
るのも、この旅の楽しみ方だ。孔子、万里の長城、ガンダーラ、オスマン帝国・・・気
なる言葉を見つけたら気軽に停泊しよう。書店で本を立ち読みする感覚で、寄港地観光を
楽しむ章の始まりだ。



先師孔子行教像（伝：呉道子、原碑8世紀頃建立）



越南婚葬行列図（19世紀末-20世紀初頭）

○第2章 西洋と東洋 交わる世界

見知らぬ世界への旅は、いつの時代も新鮮な驚きをもたらしてくれる。15世紀半ばに大航海時代が幕開けし、東西の航路がひらかれると、両者の交わりが増した。それはお互いにとって、発見の連続だったことだろう。

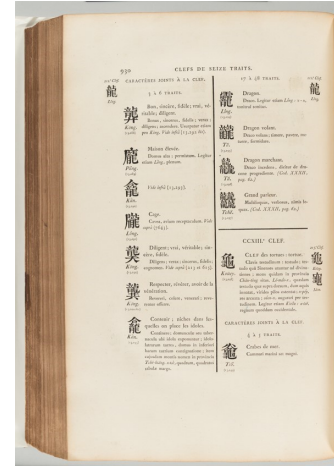
本章ではまず、東洋への誘いに大きく寄与したマルコ・ポーロの『東方見聞録』を開いてみよう。多数の言語に翻訳・出版されたこの名著は、いかに多くの人々に愛読され、東洋への関心を高めたかを教えてくれる。

東洋へ向かったのは、マルコのような商人だけでない。16世紀後半以降は、布教を志す宣教師、東西の国交を深める使命を帯びた使節団とその随行員、それに軍人や地理・天文などの研究者がそれぞれの目的で東洋を旅することが活発化し、数多くの書を世に出した。そこには、東洋各地の姿が克明に、時にユーモラスに、あるいは批判的に記される。それらは、フランス王妃マリー・アントワネットやロシア皇帝エカチェリーナ2世のような人物たちが読み、フランスのあのナポレオンに至っては自ら漢字辞典の編纂を指示した。

本章では、主に西洋の人々が東洋を訪れ、見聞きし、体験した事柄を記した書物をお供に、東西世界の交わりを探ってみよう。



東方見聞録（マルコ・ポーロ口述、ルスティケッロ著、1611年、ライプチヒ刊）＊後期展示（10月25日（火）～11月23日（水・祝））



ナポレオン辞典（ジョゼフ・ドゥ・ギーニュ編、1819年 パリ刊）＊後期展示（10月25日（火）～11月23日（水・祝））

○第3章 世界の中の日本

- （1）「日本」を見つける
- （2）西洋との出会い
- （3）描かれた日本
- （4）世界の中の幕末
- （5）翻訳された日本文化

東洋、そして世界をめぐる私たちの旅は、いよいよ日本にたどり着こうとしている。日本の歴史もまた、見知らぬ人、そして、それまでの考えや暮らしを一変させるものとの出会いの物語だと言えるだろう。

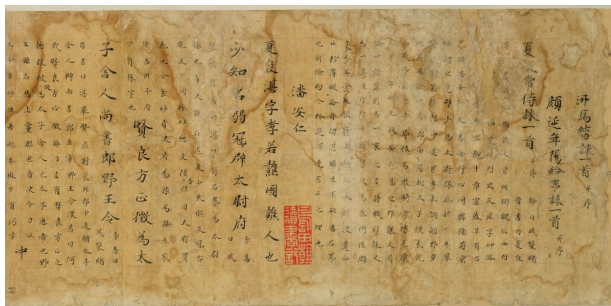
「魏志倭人伝」は日本の様子を伝える最も古い資料の一つである。こうした中国の歴史

書に現われる「倭」が日本の出発点であり、その後、1000 年以上、日本は仏教、儒教、そして漢字がおりなす世界の一員として自らの文化を育むことになる。

16 世紀以降には、西洋の人々もこの島国にたどり着くようになった。イエズス会の宣教師たちがキリスト教を伝えたとき、西洋の学問を学んだ成果が新たな医学書と正確な地図として世に現われたとき、日本の人々は大いに驚いたことだろう。他方、ケンペルやゴロヴニン、シーボルトが伝えた日本の姿は、西洋の人々の注目の的だった。

そして 19 世紀、アヘン戦争と中国の敗北という衝撃が、日本を全く新しい世界に直面させた。イギリス艦隊が中国の船隊を破壊したことは、日本にとっては、中国という大国を中心とした世界の崩壊を意味していた。

日本を取り巻く世界の記録をひもとき、日本がいかに生まれ、そして変化していったのか、その道のりをたどってみよう。



国宝 文選集注（10-12 世紀（平安時代）書写）



アヘン戦争図（エドワード・ダンカン、1843 年
ロンドン刊）＊後期展示（10 月 25 日（火）～
11 月 23 日（水・祝））

○エピローグ

今この瞬間に、世界の長い歴史の中で生まれてきた文化財が、目の前にあるということ。それがどれだけ大変なことか、考えたことはあるだろうか。経年劣化、自然災害、戦乱などによって、モノはあっという間に失われてしまう。これまで見てきた書籍や地図、絵画などは、度重なる危機を乗り越えてきたモノたちだ。

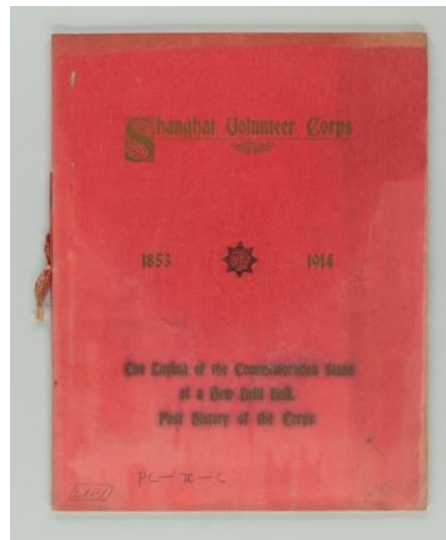
東洋文庫の代表的なコレクションである「モリソン文庫」は、中国、清朝が戦乱へ突入していく 19 世紀末から 20 世紀前半にかけて収集された。1900 年に勃発した義和団事変の際は、モリソンがコレクションを避難させていた北京の英国公使館周辺がまさに戦場となった。岩崎久彌に購入されたコレクションが日本に到着した直後には、未曾有の暴風雨と高潮が東京湾岸を襲い、蔵書が入った一部のコンテナが海水にさらされた。被害に遭った資料は駒込に運ばれ、洗浄・乾燥・装丁の取り換えなど、連日多くの人々が不眠不休で復旧作業に当たった。

東洋文庫創設後の最大の危機は第二次世界大戦である。戦争末期、東京は夜ごと空襲に襲われるようになった。東洋文庫の研究員だった星^{あやお}斌夫（中国社会経済史研究者）の尽力により、蔵書は彼の郷里である宮城県に疎開した。しかし終戦後、東洋文庫は財政の基盤が失われ、疎開した資料を東京に帰還させることがなかなかできない。1949 年に輸送の準備が整うまで、地元の人々が毎日蔵の見回りを行ったという。最大の危機に際して、貴重な資料を後世に残すために献身していただいた星先生と地元の方々に、心より感謝の意を表明したい。

こうして守られてきた書物たちは、わたしたちに長い時の流れと広大な世界をみせてくれた。この旅の最後に、文化財を守るために奮闘した人々の記録をみていこう。



モリソン文庫の蔵書票



水濡れ資料

The Shanghai Volunteer Corps.

- * 資料保護のため、展示期間中に展示箇所を変更する資料があります
- * 資料および資料画像は、すべて公益財団法人東洋文庫蔵・提供です。

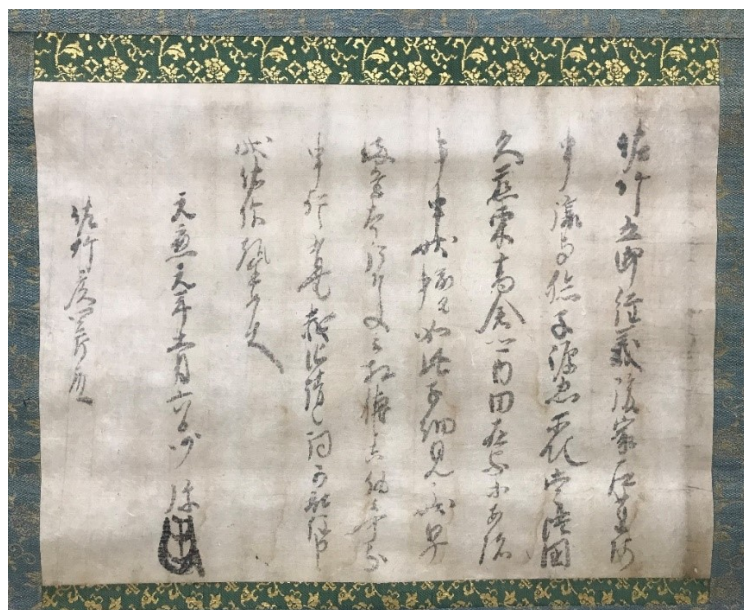
収蔵史料紹介

佐竹彦四郎宛沙弥某奉書（歴史資料課）

本史料は、今年度当館に新たに寄託されたもので、鎌倉末期の元応元年（1319）に鎌倉幕府の奉行人沙弥^{しやみ}※₁某が佐竹彦四郎に宛てて出した、訴訟事務に関わる伝達文書の正文です。現時点において、常陸国佐竹氏に宛てられた最古の文書です。治承4年（1180）の金砂合戦で、源頼朝により討伐された佐竹氏は、鎌倉時代を通じて雌伏を余儀なくされました。本文書は、その後の鎌倉幕府体制下における同氏の奥七郡※₂での動向をうかがうことができる貴重な史料といえます。

史料の内容は、佐竹五郎経義の後家蓮阿が孫の源忠に譲与した常陸国久慈東郡高倉郷（現・常陸太田市）内の田・在家※₃の安堵をめぐって起こした訴訟に関するものです。蓮阿の提訴を受けて、幕府の訴訟事務担当奉行と考えられる沙弥某が被告の佐竹彦四郎に証文や証人の有無について確かめるように指示を出していることが史料から判明します。

今後、デジタルデータにて公開する予定です。



佐竹五郎経義後家尼蓮阿
申、譲与孫子源忠所領常陸国
久慈東高倉郷内田在家等安堵
事、申状〔副具／書〕如此、子細見之状、早
備置本御下文被相伝之真偽与可分
申仁候有無、載起請之詞可被注申
状、依仰執達如件、
元応元年十一月六日 沙弥（花押）
佐竹彦四郎殿

※1 在家沙弥のこと、仏道を志して剃髪しても出家の行を全うせずに妻帯している者

※2 常陸国北部の多珂・久慈東・久慈西・佐都東・佐都西・那珂東・那珂西郡の総称

※3 中世において税負担の対象となった単位で、屋敷と付属耕地を一体として把握したもの

【参考】 笹岡明「鎌倉後期における佐竹一族—元応元年佐竹彦四郎宛沙弥某奉書をめぐって—」（『常総中世史研究』6号、2018年）

（歴史資料課 山縣 創明）

収蔵資料紹介

「広報広聴課写真資料」の読みどころ—資料の「分類」をめぐる—

企画展3（アーカイブズ展）「茨城のみち—写真からみる交通の発達と県民のくらし—」
〔会期：令和4年12月10日から令和5年1月29日〕は、当館が所蔵する「広報広聴課写真資料」を公開する展覧会である。当課に残る記録によれば、この資料は、平成24年11月7日に当館に受入れられた。広報広聴課（当時）の倉庫整理に伴い、保管されていた写真を当館が管理することになったもので、広報紙への掲載、栄典の記録を主な目的に撮影された記録写真である。撮影年代も明治初期から平成の初め頃までと幅広い。「県の事業の記録資料としての利用価値」を期待していたことが、当時の担当者からの申し送りにも記されている。目録については、受入れ時のリストをベースに、表計算ソフトに入力しなおして現在はPC上での作業が可能となった。なお、基本的な目録情報は、明らかな誤字等が判断された場合を除いては手を加えていない。写真はスキヤニングして電子データ(jpg.)化を進めている。

これらの写真の内容自体の魅力は、展覧会で実際にご覧いただくとして、小稿では内容とは別の視点から当該資料の見所を紹介したい。20世紀を代表するフランスの哲学者の一人、『狂気の歴史』『監獄の誕生』『性の歴史』などの著作で知られるミシェル・フーコー（1926－1984）は、ある時代やある社会において人々の思考や認識を規定する知の枠組（エピステーメー）があることを指摘した。私たちの思考や認識は、その特定の枠組みにしたがってなされる。そしてそうした枠組みは、歴史的に変化していくと論じた〔ミシェル・フーコー、1974（1966）『言葉と物』〕。同書の冒頭、フーコーは中国のある百科事典における動物の分類体系に自らの「思考の限界」をみるほどの驚きを覚えたことに触れている。すなわち、「皇帝に属するもの」、「香の匂いを放つもの」、から「放し飼いの犬」、「この分類自体に含まれるもの」、さらには「いましてた壺をこわしたもの」等々。おそらく現代に生きる多くの人がある分類体系に奇妙さを感じるに違いないが、そうした分類を可能にした基準こそフーコーの指摘した知の枠組に関連する。「分類」には何らかの恣意性、分けた人の意図や意思が働く。そうした視点を念頭に置いて、広報広聴課写真をみてみるとどうだろうか。繰り返しになるが、目録の項目は、受け入れ時のものが踏襲されたものである。一万点を超える写真は、「知事・副知事」「議会」「総務」「広報・広聴」「環境・原子力」「生活福祉」「医療衛生」「商工労働」「農業」「林業・畜産」「水産」「土木」「教育・スポーツ」

「芸術」「祭」「文化財・歴史」「警察・交通」「鹿島開発」「学園都市」「科学博」「常陸那珂地区」「茨城の味」「観光」「国際交流」「動植物」「皇室」「イメージフォト」「コミュニティ」の計28の「部門」ごとに整理されていた（下表）。まず「知事・副知事」、「議会」が部門の最初に挙げられるのは、この写真群の特徴をよく表している。「皇帝に属するもの」ならぬ「知事・副知事が写ったもの」は広報紙への掲載頻度、外部への提供機会も多かったであろう。この分類体系を作った旧“所蔵者”—おそらくは当時の担当職員と予想される—には、重要度の高い写真と認識されていたのだろうか。いまその経緯を細かく知る術はないが、当該資料の深い読みへと誘ってくれるこれらの背景情報への関心は尽きない。また、「環境・原子力」「鹿島開発」「学園都市」「科学博」「皇室」など、国家的・国際的にも大きな関心を集めた事業に関わる部門もある。当館の所蔵する同時期の公文書とも照らし合わせることで、茨城の戦後史、高度成長期の時代相をありありと浮かび上がらせることが可能になる。

ところで、日々の暮らしの中で私たちは「分ける」ことを無意識に行っているが、分けるという営みにあらためて向き合うと、その根拠に些かの心許なさを感じるような不思議な感覚をおぼえる。こうした「分けること」への自問は、折しも開催中の秋季特別展「知の大冒険」の見所にも連なってこよう。たとえば、自分と他者、東洋と西洋。その分類の拠り所は、必ずしも絶対的な確からしさをもつものではないことに気付かされる。筆者の所属する行政資料課の業務はまさに「分ける」「集める」が業務内容の中核を成している。収集する（集める）ということは何らかの基準に拠って選り分ける行為に他ならないが、同時にそれは「除く」行為でもある。アーカイブズを題材に展示を組むという直近の課題に寄せていえば、行政機関が発行する広報紙のために撮影された記録写真や“県庁の人たちのお仕事”の成果としての公文書に、“意外な”発見や、各資料の読み解き方も含めた鑑賞的な面白さを提示する方法も課題である。一見、無機質で無関係に思える公文書や写真資料から、時代的な特徴や作成当時の社会を読み取ることは容易ではなさそうだが、それだけに資料と向き合う楽しみも未知数といえるのではないか。当然のことながら、こうした活用は、資料を丁寧に読み込む基礎研究があつてこそ可能になる。

当館に移管された文書ファイルの整理の仕方を具にみれば、明らかに担当職員個人の癖や性格のようなものもある。一方で同時期の文書には共通する一定の型も見出せそう。保管庫に山積したファイルを、当該業務に関わった或る担当者が次代に業務（情報・知識）を引き継ぐという意図をもって「作られた」ものとみるとどうだろう。フーコーにならっ

て“知のアルシーブ”の対象とする道もみえてきそうである。ゆくゆくは、人の営みとしてそれらを相対化することも可能になるかもしれない。そうした偶感さえ持っている。人々の営みの中に埋蔵された「知の考古学」を試みたフーコーの視点は、他ならぬ“アルシーブ（アーカイブ）”の展示を考える我々にとっても有益な示唆に満ちている。来館者の知的好奇心を触発する活用に挑戦的に取り組むことで、アーカイブズ活用の「みち」を模索していきたい。

表 茨城県立歴史館蔵「広報広聴課写真資料」の部門別枚数

記号	部門	枚数	記号	部門	枚数	記号	部門	枚数
O A	知事・副知事	576	O L	土木	702	1 A	茨城の味	315
O B	議会	330	O M	教育・スポーツ	637	1 B	観光	745
O C	総務	259	O N	芸術	301	1 C	国際観光	134
O D	広報・広聴	135	O O	祭	113	1 D	動植物	839
O E	環境・原子力	348	O P	文化財・歴史	1,600	1 E	皇室	143
O F	生活福祉	367	O Q	警察・交通	210	1 F	イメージフォト	270
O G	医療衛生	251	O R	鹿島開発	593	1 G	コミュニティー	54
O H	商工労働	311	O X	学園都市	299			
O I	農業	392	O Y	科学博	191			
O J	林業・畜産	280	O Z	常陸那珂地区	173			
O K	水産	230						

(行政資料課 林 圭史)

トピックス

令和4年度 上半期の歴史館

○日曜歴史館

当館職員・外部講師による五つの講座を実施し、多くの方々に受講いただきました。

美術、考古、民俗、近世の各分野での学びをさらに深めて、「日曜歴史館」を通して茨城の歴史や由来を“知る愉しみ”を受講者の方々が実感されているようでした。

- ・ 「一橋徳川家の玩具（5月1日）」
- ・ 「三昧塚古墳と沖洲古墳群（6月12日）」
- ・ 「日本人と神社信仰（8月7日）」
- ・ 「幕末草莽の女たちー加藤木りよ・太宰せい・紀州屋いくー（9月4日）」
- ・ 「茨城の俳諧（10月2日）」



○よろい・かぶと体験（5月5日）

戦国武将が身に付けた甲冑4頭（一橋慶喜、山本勘助、伊達政宗、榊原康政モデル）の試着体験を実施しました。16人の参加者が好みの甲冑を身に着け、誇らしそうにポーズを決めて写真撮影をするなど、武将気分を満喫していました。



○いにしへのピアノ演奏体験（５月２２日）

旧水海道小学校本館にて、スタインウェイ&サンズ社が慶応元年（1865）に製造したグランドピアノの演奏体験を実施しました。初めは少し緊張気味でしたが、いにしへのピアノに思いをはせながら、楽しんで演奏する姿が見られました。

参加者からは、「柔らかい音色だった」、「少し弾いたときタッチが重かった」、「江戸時代末期に作られたピアノを演奏できて貴重な経験になった」等の感想が寄せられました。

旧水海道小学校本館に響わたる音色が参加者を楽しませる、とても素敵な演奏会となりました。



○歴史館まつり（６月４日、６月５日）

子供から大人まで楽しく遊んで学べる歴史館ならではのイベントを多数実施しました。

「襖の裏貼り剥がし体験」、「よろい・かぶと体験」、「勾玉作り体験」等の体験活動や、近隣の学校の協力を得て吹奏楽コンサートも実施しました。庭園の新緑がまぶしく輝くなかで、２日間ともたくさんの方々にご来館いただき、大盛況となりました。



○チャレンジ！昔のあそび（８月２１日）

それぞれの時代に行われた様々な「あそび」を通して歴史への興味・関心を高めることを目的に、体験型イベント「チャレンジ・昔のあそび」を実施いたしました。

江戸時代のあそびとして、扇を的に当てて得点を競う優美な日本の伝統遊戯「投扇興」、ユーモラスな絵を見ながら解くことばのなぞとき「判じ絵」を行いました。さらに今回は、夏季企画として浮世絵版画の妖怪すごろく「百種怪談妖物双六」コーナーを設置しました。

昭和レトロなあそびとしては、「ベーゴマ・こま」、「めんこ」、「お手玉」、「けん玉」、「輪投げ」、「おはじき」、「折り紙」を実施いたしました。

幅広い世代の参加者がそれぞれのあそびに興じ、懐かしい遊びを体験出来て嬉しかったとの感想も多数いただきました。様々な昔のあそびが、時代を超えて笑顔を与えてくれるイベントとなりました。



各イベントについてのお問合せは、

茨城県立歴史館 教育普及課、TEL：029-225-4425

または、ホームページの「お問い合わせ」からメールをお送りください。